



# 通信

2009.4 vol.6

NPO法人 山と心に木を植える  
ホネびとプロジェクト委員会

◇ も く じ ◇

- 国有林の今昔 . . . . . P.1
- 第4回通常総会報告 . . . . . P.2
- 大人の絵本を出版 . . . . . P.4
- 編集長のページ . . . . . P.5
- 足尾発! . . . . . P.6
- こちら!みちのく事務所 . . . . . P.7
- 森びと奮闘記・心の森便り . . . . . P.8

昭和27年4月、青森営林局（現、東北森林管理局）大槌営林署（統廃合）に新規採用で入署しました。

その当時の国有林経営は伐採、搬出、植林手入れ、苗木生産など主事業は直営直用で実行されていました。立木調査、植林などの一部は地元住民の協力で実行されていました。

直営生産は「斫伐」と呼び、主としてブナ林の伐採で択伐作業でした。この択伐作業も10%から多くて30%の範囲でとどめられていました。また、アカマツ自然林までも択伐作業で実行されました。

丸太の搬出は一部を除けば「木馬」による運材でした。植樹も伐採全面積をただ植栽するのではなく、経験者が地形、地理などを勘案して「植樹場所」を決定していました。植栽本数は3,000本植で、下草刈りは年2が普通でした。枝打ち・間伐も実行されていました。残雪地方の枝打ちは残雪を利用して実行されていました。それは積雪高の分、木登りが必要なかったことも理由のひとつです。

苗木の生産も種子採取、選別、乾燥、床作り、播種、床替えから山だしまですべて直営直用でしたから、今回のような徒長苗ではありませんでした。

苗木の活着率を高めるために床替えと根切りを適宜実施し、優良苗を作るのが従事者の誇りだったのです。植栽苗の5%以上が枯死した場合、その責任が問われました。植栽する従事者も真剣だったのです。このようなことから立派な森林が生育したのだと思います。

このように永年つちかわれた経験則と林業技術論によって経営されてきた国有林経営も1957年の国有林生産力増強計画、1961年の国有林木材増産計画によってそれまでの国有林経営が一変されたのでした。この計画樹立の裏には高度経済成長政策のためという大義名分が存在し、生長



## 国有林の今昔 (私の見てきた国有林)

新潟県中央森林環境センター 代表 関根依智朗

の遅いブナなどの広葉樹林から生長の速いスギ、ヒノキなどの針葉樹林へ林種転換が必要だとされたのです。今日では見ることのできないブナ的美林が次から次へと各地で伐採され、消滅していきました。

作業機械も手鋸からチェーンソーへ、手鎌からブッシュクリナーなどへと変わり、木馬や森林鉄道から自動車道へと変えられたのです。この2つの

計画と機械化によって大面積皆伐が実行されたのでした。新潟県の浅草山麓（現、大日町森林管理署）のブナ林は、昼なお暗い希なるブナ的美林でしたが、年間多い年で伐採面積が100 ㍍を超えていたのです。

2つの計画以前は地元住民の協力で植林から手入れまで充分に実行されていたのですが、大面積皆伐後の植林と手入れには地元民だけでは間に合わず請召が導入され、下刈りまでは何とかできたものの倒木起こし、枝打ち、間伐などは放置状態にならざるを得ませんでした。手入れ不足に加えて、積雪7~8 ㍍を超える場合にもスギ、カラマツを植栽しましたが、豪雪地帯ではスギは倒木して成林せず、カラマツは見る影もなく消滅してしまったのです。植栽も正方形植えから並木植えや巣植えが導入され、比較的小雪地帯でも成林が危ぶまれています。この2つの計画が発表されて以降、林野庁は「収穫量は2倍になり国有林の将来はバラ色」であるというカラー刷りのチラシを全職員に配付しました。

最後に、この2つの計画は林業技術を無視し、山を荒らし、地元住民の雇用の場を奪い取り、職員には犠牲を強いる何ものでもなかったのです。私は、この計画を樹立し、推し進めた当時の幹部の責任は重大だと思います。退職者も現職者も反省し、国有林経営はどうあるべきかを考えたいと思います。



## ■第4回通常総会報告

3月29日、東京都千代田区「毎日ホール」で第4回通常総会を開催しました。総会には、正会員369名中333名（内委任状246名）が出席しました。正会員数の三分の一以上の出席を得ましたので、第4回通常総会は成立しました。

角岸副理事長の開会の挨拶後、オープニングビデオで八幡平の森づくりが上映されました。続いて、清水卓会員を議長に選出、岸井理事長の挨拶、その後、古河機械金属株式会社環境保安管理部長幸崎雅弥様から来賓のご挨拶を受けました。

議事では、1都8県の正会員15名（内1名は委任状での意見）の意見が出され、質疑応答後、2009年度事業計画案と予算案等は満場一致で決裁承認されました。

### <自然環境をめぐる状況>

国立極地研究所長・藤井理行さんは、「グリーンランド、ヒマラヤ、アルプス、パタゴニアの氷河は急激に小さくなっている。地球の冷房装置が壊れると地球は大変なことになってしまう」、と語っています。

地球がおかしくなっているのですが、一部の人間は二酸化炭素排出削減をビジネスにしています。「エコ商品の買い換え運動」でCO2の削減を、と煽るある大学教授、林野庁は「間伐をすれば木の生育が良くなってCO2の吸収量が高まり、この森林の吸収量を企業に売る。その上、間伐材で「エコ商品」を生産・消費すればさらに排出が抑えられる」として、間伐作業員へ補助金を出す計画をしています。海外では、アメリカの機関投資家グループ等は「気候変動に関する投資宣言」を発し、効果的な投資や年金の運営には温暖化のリスクを減らすことが不可欠だとして、各国は排出枠を決めて排出量取引の市場メカニズムを活用する制度を確立せよ、と語っています。

間伐された森林は価値が上がり、それは投資の対象物となります。これに目をつけた投資家は、森林を証券化して売買し、更なる金儲けをしようとしています。日本の森が危機に瀕する日が間近に迫っているといっても過言ではありません。今後は、オバマ大統領の「グリーンニューディール政策」の波に世界各国が乗せられ、働く者や若者からの「エコ収奪」が始まることでしょう。

社会環境もおかしくなっています。3万人を超える自殺者が10年連続記録されていたといいます。低賃金で働い



ている契約社員は、契約期間中にもかかわらず契約破棄を通告され、住居からも追い出されてしまいました。金儲けのためには偽装がまかり通り、金儲けのためには私たちの健康や命はゴミのように扱われています。この事態は、人間の欲が暴走して、自然は人間が支配できるという傲慢な考え方が引き起こしたのではないのでしょうか。ここには植物社会の掟すら見えません。

今年の森づくりでは、森の力・森の効用を生態学的に身体に擦りこむことを努力します。木陰は涼しいとか、森はきれいだとか、という意識でいる限り、地獄のような時代から抜け出すことはできません。この時代をこれからも許していけば私たちの未来に幸福は見えません。

私たちは、森（自然）と共に生きていくための「分かち合う、支え合う」、という心を森と人から学び、多くの人へつなげていくのちの森づくりをすすめていきます。

## 1、森づくりに係わる植樹、育苗事業

### 「ふるさとの森づくり」に関して

2005年から始めた森づくりは今年で5年目を迎えました。これからの森づくりは、山に木を植えてきた5年間を基礎にして、森づくりを通して心に木を植えていくことに力点をおきます。

具体的には、森づくり事業を通じて多くの方々に「分かち合う、支え合う」という心を育てていただきたいと思います。例えば、煙害によって廃村に追い込まれた足尾町の旧松木村の歴史を振り返り、煙害前の村人の生活から、現代社会のなかで失われつつある「分かち合う、支え合う」という心を探しあてていきます。また、八幡平では、石川啄木が100年以上前から私たちに警鐘乱打していた「命の森」の心を育てていければと願っています。



## 2、「森と生きるキャンパスフォーラム 2009」の開催

昨年開催したフォーラムでは、これから地球とともに生きていく私たちの課題が見えてきました。それは人間は自然を征服できるという考えの基に、果てしない欲の追求によって森を破壊してきた歴史を繰り返さない、ということでした。第2には、自然環境問題は極めて政治課題であり、それは大人の責任であること。第3には、社会の潮流化しつつある「持続可能な社会」に流されず、森との共存という文化が持続可能な社会を創りだす、ということに自信をもつこと。第4には、日本の森が危ない、私たちは森を破壊する者との闘いをせざるを得ない。これなしには、子どもたちや私たちの幸福はつかめない、ということでした。

今年のフォーラムは、「森と生きるキャンパスフォーラム 2009」として第2回目を開催します。本物の森を守っていくために、本物の森を守るプロを育成していくためには私たちは何をすればよいのか、を探っていきます。高等学校、各大学にも参加を呼びかけて、年配者も若者も一緒になって準備・運営を行います。詳細は7月招集予定の理事会で審議・決定します。この準備に併行して、本物の森を守るために森を守るプロ育成の「提言」案を創りあげていきます。

### ■「森と生きるキャンパスフォーラム 2009」

- ・開催日 11月中
- ・会場 東京都内のキャンパス（予定）
- ・テーマ 「日本文化の再認識」と「日本の森を守ろう」
- ・＜内容＞

シンポジウム：「命の森へ進路をとれ」

—本物の森を守るために私たちは何をすればよいのか—

（パネラー）：森を守っているプロ・木を植えている

方・その他

講演：「世界の森を守るために」（仮題）

### ■日本の森を守る「提言」作成

- ①提言は理事会内に設置した提言作成チームが案をつくります。
- ②森林行政の動向、森を守っているプロの声、学者・専門家の意見等を参考にして、日本の森を破壊させない方向と森を守るプロの育成ということを国に求める「提言」（案）を作成します。

## 3、収益事業に向けて

- ①苗木づくりは、苗木の生長過程を見守り、苗木の市場調査に力を入れます。
- ②森びとグッズは、各地のイベントに参加している方々から2年目の評価を把握します。
- ③大人の絵本『サルと人と森』（原文：石川啄木『林中の譚』）のキャンペーンに力を入れます。  
この「大人の絵本」を多くの方々に読んでいただき、心に木を植えていきます。

## 4、森づくりに係わる教育養成事業

- 第5期「森びと教室」は休講とし、「森びと塾」を開催
- 「森びと塾」

森びとインストラクターは第4期修了者をもって120名を超えました。ところが各地で森づくりを創りだそうとしても様々な事情で、習得したことを活かせずにいる方が少なくありません。そこで少しでも森びとインストラクターが活動できる環境を提供するために、「森びと塾」を開講することにしました。同時に、各県の森びとインストラクターは自主的に「〇〇県ファンクラブ」を結成し、地域で森づくりを進めようと奮闘しています。塾はインストラクターが地域で自主的に活動するための、「学ぶ」場としていきます。

## 心の森探訪

秋には、ブナの美林を探索します。  
2010年は、母島を訪れます。

詳細が決まり次第、ホームページ上でご案内致します。



## サルが言いました。人間の最悪の思想を改めろ、と。



サルは言いました。

ああ、とうとう人間の最悪の思想を吐き出したな。  
人間はいつの時代にも木を倒し、山を削り、川を埋めて、平らな道路を作って来た。  
だが、その道は天国に通じる道ではなくて、地獄の門に行く道なのだ。  
人間はすでに祖先を忘れ、自然にそむいている。  
ああ、人間ほどこの世にのろわれるものはないだろう。

サルはそう言い終わると、

人間が気の毒でたまらなくなりました。

木の下人間は、サルに真のことを言われたと感じつつも、  
しかし、それを認めることはできませんでした。  
そして腹をたて、歯ぎしりをして林を出ようとししました。

このたび、当委員会は大人の絵本と称して『サルと人と森』を出版しました。原文は、石川啄木著『林中の譚』ですが、これを石川啄木記念館の学芸員・山本玲子さんが訳しました。絵は、多摩美大卒の鷺見春佳さんが描いてくれました。

「文明の岐路、歴史の大転換期」を向かえている私たちが、今の生活や生き方を根本から見直すきっかけを、石川啄木の『林中の譚』は示しています。多くの皆さんに読んで頂きたいものです。一冊・1,000円でお分けしています。

### 人間は森や自然にもっと謙虚になろう！

最高顧問 宮脇 昭

歌人として有名な石川啄木は素晴らしい哲学者であり、人間の正しい生き方を見極める先見性を持った思想家であ

る。今からちょうど102年も前に「サルと人と森」の関係をわかりやすく説いている。今、私たちが読んで本当に現代の人間に当てはまることを啄木はすでに102年前に盛岡中学校の校友会雑誌に発表している。人間が間違いなく未来を生き延びるためには、もう少し森や自然に謙虚でなくてはならない。人間は科学的には森の寄生者、多彩な生物社会の一員としてしか、持続的には生きていけない。そして生物としての生き方、プラス人間の知性や感性をもって着実に現場から本物志向で生きなければいけないことをいみじくもこの寓話によって示している。

### 現代人の迷路を脱するヒントはこの絵本にある

理事長 岸井成格

今、世界も日本も文明の岐路に立っています。歴史的な大転換期です。近代・現代文明が行きづまり、あらゆる分野で矛盾やホコロピが噴出しています。

その最先端の問題が、地球温暖化と環境破壊です。そのことに対する危機感から、人類の意識も大きく転換をせまられています。

文化人類学者のトール・ヘイエルダールさんは、NHKのテレビで語っていました。「進歩の行き先は何ですか？その目的は何ですか？突き詰めれば『人が笑顔で幸せに暮らせること』ではないですか？人の幸せは、便利なものに囲まれていたり、ハカリにかけて計るものではありません。幸せは感じるものです」と。

人はようやくそのことに気づき始めました。どうしたら迷路を脱することができるのか、手探りが始まりました。

その解答の一つが、この絵本にあります。



## 編集長のページ

“本物の森”を後世に残すために、森びとプロジェクト委員会がスタートを切ったのは2005年。あっという間だったが、振り返ってみると失敗から学ぶことの多い5年間だった。

足尾で森づくりを始める前は、北海道の大沼で、JR北海道と東日本の労使が行った「大沼ふるさとの森づくり」に



### 本物の森を作り続けるために

2000年から04年まで参加したことがベースになっている。その後、有志が森びとを立ち上げ、拠点を足尾と八幡平に移した。私も大沼の森づくりに1年目から参加し、週刊誌「サンデー毎日」（毎日新聞社刊）誌上で、毎年リポートを掲載したことが、森との付き合いのきっかけでもある。

ここでの体験は想像よりも奥が深く、あらためて「自然の中ではセオリーは通用しない」と実感した。

2000年の「大沼ふるさとの森づくり」では、流れ作業で3時間足らずで3万ポットの鉢が出来上がった。ズラリと並べられた苗床を見て、満足したことを昨日の出来事のように思い出した。ポット苗づくりはみんなで一緒に作る達成感が味わえる上に、ひと汗かいた後の懇親会場でのジンギスカンとビールも忘れられない味となり、今も記憶の片隅に残っている。

そして、翌年。前年作ったポット苗を、はやる気持ちを抑えて見に行っただが、腰を抜かしてしまった。50本程度しか苗木に成長していなかったからだ。

まさに“大失敗”である。ドングリが成長しなかった原因を当時のメンバーが教えてくれた。

ひとつはポット苗を植えたのが秋で、その後も温暖な日が続いたため、ドングリが春と勘違いをして芽を出して、その後、雪の重さで芽がつぶされてしまった。または、関東から持っていったドングリは、北海道の土に合わなかったから、芽が出なかった。

苗木の成長が思ったよりも早く、根っこがポットの穴から地中に貫通してしまい、抜く際に根っこを痛めてしまった。はたまた、小動物のイサになった……と、枚挙にいとまがない。これらがすべて原因かどうかは正確には実証されてはいないが、大沼の失敗は森びとに生かされていると思う。

例えば苗床の下に敷かれている黒いビニールシートは、

根っこがポットの穴から地中に貫通するのを防ぐために導入された。また、ドングリも「ふるさとの森」から生まれたドングリが使われるようになった。

何よりも肝心なのは、ポット苗から植樹をした後、3年程度は下草刈りなどの手入れ、“育樹”が大切で、この時期の手入れが、本物の森になるかどうか

の明暗を分けるのだ。それを実感したのは今年3月、東京近郊の、ある植樹会場を見学に行ったが、あまりのひどい出来に言葉を失った。

7年前の秋に、約千人が集まり1人10本、ブナやミズナラを植えたというが、「クスノキ」が植えられている一帯は、なんと白い筒の中に木が入っていた。カモシカの食害から木を守るために、筒で覆ったそうだ。ちなみに筒は「生分解性プラスチック」で、10年後に土に戻るという。

そもそもスギ林を開墾して、その隙間に植えたようだが、あまり日差しが入らないのが気になった。一面は下草があまり生えていなかったため、苗木の発育にも影響を与えたのだと思った。

7年経過した木の太さを図るためにメジャーを持っていたが、その必要はなかった。どの木も背丈は160センチ未満で、添え木の竹よりも細かったからだ。

なぜ、同じ手法で植樹をしているのに、足尾とは違う出来なのか。足尾の手入れ、育樹方法を振り返ってみると、差は歴然であることに気がついた。森びとのホームページ上でも、日々メンバーが足尾での“育樹”が報告されるように、ほぼ毎日のように誰かが、作業をしているのがよく伝わる。

05年に植樹をした場所が今では、大人の背丈を超える木もあるほど順調に成長している。それは、一過性のイベントで終わらせるのではなく、日々の積み重ねの結果なのだ。

そして今年、会では「5年間の森づくり報告書」が作成される予定だ。

足尾と八幡平での木の種類、本数、参加者、食害対策、地域へのつながりなど、これまでの取り組みと結果が明らかになるが、この5年間の取り組みは“育樹”の手本になるのではないか、と期待している。（村田久美）



## 足尾発！

今から百数十年ほど昔、このあたりには古くから続く豊かな村がありました。当時足尾でもっとも大きな村の一つ、松木という村です。今では家の跡すら残っていませんが、もっとも栄えた頃には四〇戸二七〇人もこの村人が生活をしていました。小麦、豆をはじめとする肥沃な畑があり、養蚕が盛んで、奥深い森の中にある恵まれた土地であったそうです。

この村の生活が一変するのは、足尾銅山が近代的な鉱山として本格的に稼動しはじめて、わずか数年後のこと、製錬所から大量に放出された亜硫酸ガスによる煙と酸性雨が原因でした。

その影響は、農産物の不作、蚕の餌である桑の木の枯死という形で、村を直撃します。周囲の森も例外ではありませんでした。もともと銅山の活動には大量の木材が必要で、足尾の山々では度重なる樹木の伐採が行われていました。偶発した山火事の被害も重なり、森は衰退の一途をたどります。やがて木々を失った山からは土壌が流れ出し、固い岩盤だけが骨のように残る無残な姿に変わり果てていきました。

生活の場と糧を失った村人は、いくばくかの示談金で他の土地に移ることを余儀なくされます。豊かだったころには誰も想像もつかなかった理由で、村はその歴史を閉じたのです。村人の居なくなった集落のはずれには、鉱山ででた残滓（カラミ）が無造作に捨てられました。後ろを振り返ると目に入る、黒い砂地のような斜面が、その廃棄場所です。

煙害が終息したのは村がなくなっただけからさらに数十年ののちのこと、その間の被害の拡大は目の前に広がる風景が物語っています。

森はあらゆる生命にとつてのゆりかごであると言われています。それほど大切な森ですが、一度失ってしまうと元に戻るためには数百年という長い年月が必要なのです。しかし少しでも早く回復するために人が知恵を出し、力を貸すことはできます。私たちは、この松木村のあった場所で、自然と歴史を学びつつ、土地本来の木々を植えていく活動をしています。私たちの願いは失われた村を支えた自然を取り戻すこと、そして足尾の森が再び豊かな恵みをもたらしてくれること。日本の公害の原点であるこの地から市民による森づくりを発信しつづけていきます。



## 森と生きる人の心が蘇る「松木の杜」づくり

足尾ふるさとの森づくりは、今年から新たに面積1万㎡程度の平地に植樹ができるようになりました。この地は旧松木村であったところです。所有者は古河機械金属株式会社様です。昨年暮れ、岸井成格理事長と事務局は古河機械金属(株)本社を訪れ、相馬信義社長へ平地での森づくりが出来るようお願いをしました。そして新年を迎えた1月、ついに私たちの願いが了承されました。その後、古河機械金属(株)本社と足尾事業所の担当の方々と共に現地を測量し、それを基にして、双方が覚え書きを交しました。

「松木の杜」づくりを通して、100年以上も前の松木村に近づこうと様々なことに挑戦しています。今年、足尾の森づくりを始めてから5年目を迎えました。このことを記念して、この地を訪れるハイカー、釣り人、見学者の方々そしてボランティアの皆さん向けの「松木村の看板」(仮称)を設置します。

上記の文はその案です。看板には、この文案と当時の松木村の様子を油絵具で描いた絵を掲出します。また、現在の松木沢周辺の生態を紹介していく予定です。

「松木の杜」づくりでは、人と森との大切な結びつきを実感できるようにしていきます。

そのため杜の中には負の遺産はそれとして残し、もう一方では自然への謙虚さや村人の生活から、支え合い、分ち合いの必要性を感じてもらえるような畑や道づくりも行います。

ビオトープを作り、食物連鎖について学び、たまには四季の花や森の素晴らしさを感じてもらえる場としての東屋なども造ります。

10年後には、この地を訪れる方々が、日本人の素晴らしい心が蘇る杜を目指しています。



## こちら！みちのく事務所



### 遂に、炭も手作りしちゃいました！！

桜の花もほころび春の訪れを感じる季節になりました。みちのく事務所は今年も本物の森づくりへ向け活動をスタートしました。まず、2009年初めは、「炭づくり」にチャレンジしました。

みちのく事務所が植樹している八幡平の松尾鉱山跡地は強酸性（PH=3）の土壌で動植物が育たない環境とされています。そこで植樹した苗木が育つように土の入れ替えやバーク堆肥、木皮、粉碎した貝殻、粉炭などを入れて土壌改良を図ってきました。これまで資材は、地域の皆様のご協力を頂いて調達してきましたが、今回は土壌改良に欠かせない炭を自分たちでつくってみることにしました。幸い岩手県「県民の森」・伊藤所長が炭窯を貸してくれることになり大変助かりました。

炭焼き体験は、まだ雪の残る岩手県「県民の森」の炭窯を借用して伊藤所長に指導を頂き、炭材の準備から炭窯への炭材の詰め込み、火入れ、火力調節、火止め、窯だしの行程など4日間の炭焼き体験でした。

特に難しいのは、火入れ、火力調節、煙突から透き通った青白い煙を見て火を止めるタイミングが難しく火入れから火止めまで約18時間かかりました。火止めから2日後に窯だしを行い、炭窯を開けた瞬間！！水分が無くなり量としては50%ほどになっていましたが、その出来栄に

「すんげー！」「出来ているー！」と思わず歓喜の音が山林にこだますほどの感動でした。成果は14袋（70L）、とまらずの出来栄でした。

今回の炭焼き体験は4日間、延べ15名の参加でした。炭づくりはなかなか体験できるものではありませんが、ただノウハウを覚えただけでなく、人間は文明の力に頼らなくても生きていける知恵を持っていることを学べたことが一番の成果でした。そして、森づくりを通じて「何事もチャレンジ（実践）することが大事」である事を実感することができた体験でした。



はじめての挑戦を果たした仲間たち



できあがった炭

### 第5回

### 「八幡平・ふるさとの森づくり」 開催

・ 21世紀の雲上の森づくり ・

実施日 2009年6月6日（土）

募集人員 150名

事業内容 2,300本の植樹

参加費 1人・1,500円



## 森びと奮闘記

### 「森びとファンクラブ」の結成つづく

(埼玉県)

埼玉県内に住むインストラクターが中心となってファンクラブを発足させました。そのメンバーの大木さんは第4期生。実家は九州で、2年前に里帰りした時に幼い頃に親しんだ里山が荒れていたことに愕然とし、里山再生を目指しています。まもなく九州に帰り、3~4ヶ月間に再生のための調査と準備体制を整える、と言っています。

第4期の大塚さんは、以前から新潟県十日町で交流を深めている仲間のみなさんと森づくりをしたい、と仲間達のみなさんに訴えています。ゴールデンウィークの5月4日は、その仲間達が集まる機会を森づくりにつなげたいとして、森びとの森づくり活動をその皆さんに伝える場をつくりました。

第4期の遠藤さんは、埼玉県内の植樹活動を調査し、自治体の方々との話し合いを積み重ねています。勿論、自治体などの植樹際にも参加して、地元の皆さんと一緒に、なつていのちの森づくりがつかれないか、と休日に爽やかな汗をかいているようです。

(神奈川県)

横浜市と川崎市に住むインストラクター達は、5月20日のクラブ発足に向けて会合を重ねています。3月から始まった準備会合では、組織構成から活動理念そして第4回通常総会の事業計画等を読み合わせています。会合では、ファンクラブはインストラクターばかりでなく、友人知人を誘っていこう、という話も出ているそうです。

### 中学生に講話、感動の感想が寄せられる

(栃木県那須ファンクラブ)

第1期インストラクターの星野さんは昨年11月、地元中学3年生の道徳の時間にゲストティーチャーとして、「人も自然とともに」という講話をしました。生徒達から感動の感想が届いた、ということで星野さんから話を聞きました。

「お話を聞いて炭のすごさがよく分かりました。私は炭の有効利用法なんてないんじゃないかと思っていたので、田んぼにまくと肥料が半分ですむということを聞いて、それってすごいサイクルだなあと思いました。ドングリ

を蒔くと芽が出て生長したのに驚きました。全然知らなかったです。自然って大切なんだあと実感しました。私はこれからはあまり自然のムダ使いをしないよう心がけていきたいと思います」と、という感想でした。(ほんの一部です)



## 心の森便り

3月21日、事務局メンバーは江戸時代から生きているだろろミズナラに遭うことができました。場所は足尾の安蘇沢を約4km上ったところです。ここ足尾の山々をばげ山化した亜硫酸ガスに耐えながら、しっかりと根を張って全生物の命を守ってきたミズナラと遭ってきました。



同行した小林君の身長は167㍓、彼の腕で幹の周囲を測ってみると最大で5㍓ものミズナラが生きていました。一年に1㍓生長したとすると250年も生きていたこととなります。その他にも、シラカンバ、ウダイカンバ、ダケカンバ、リョウブ、ヤマハンノキ、カエデ、ツツジ等が生えていました。下草は枯れている時季なので分かりませんが、ササが生えていました。今後は、植生調査を行っていく計画です。



### 助成金をいただきありがとうございます。

今年の事業も心ある個人、団体の皆さま方からのご支援、ご協力によりまして、山と心に木を植える活動をすすめています。心より御礼申し上げます。



### 編集後記

4月12日、第一回目の「森びと塾」が開催された。30数名が塾生となって、午前中は千葉県の鎮守の森・「笠森寺」の自然林を探索した。午後は、宇梶静江(アイヌ古布絵作家)さんの講演を聞いた。宇梶さんは「動植物はアイヌの生活に生かすためのもの」という。ゆえに生きていくためには、動植物から学ばなくてはならない、ということである。植物は食料となり、薬にもなっている。動物も食料になったり、動物から自然の情報をいただいている、という。動植物と共生していかないと人間は生きていけない、ということを生活の中から学び、それを次世代へとつなげている。

物事を考える視点が「大地」というのである。宮脇昭最高顧問の視点も「生物社会」から人間社会を覗いているように、人間社会の本質を見抜くには、まずは生物社会の一員でしかない、という視点が重要である。



森びと通信 Vol.6 (2009年4月20日)

発行 NPO法人 森びとプロジェクト委員会

発行人 岸井 成格

編集人 村田 久美

〒114-0013 東京都北区東田端 1-12-24 二美ビル 201号室

TEL&FAX 03-5692-4900

E-mail info@moribito.info <http://www.moribito.info/>

(みちのく事務所) 〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通 2-16-31

TEL&FAX 019-623-1014 E-mail mrbt-michinoku@max.odn.ne.jp